

Hiroshima
Amateur
Athletic
Association



NEWS

陸協ひろしまニュース [第60号]
財団法人 広島陸上競技協会



世界5位 視界にとらえた北京 尾方 剛。

陸上人

FILE001

尾方 剛

中国電力

Tsuyoshi Ogata

世界5位 — 視界にとらえた北京

プロフィール | 尾方 剛(おがた つよし)
1974年5月11日呉市生まれ/165cm/50kg/熊野中一熊野高一山梨学院大/中国電力/妻の芳子さんと長男杏丞(きょうすけ)君

主な成績 | 1987年・中国中学校駅伝2区区间賞/1991年・石川国体少年男子A10000m2位/1994年・箱根駅伝10区区间賞/1997年・日本選手権10000m16位、世界ハーフマラソン30位/2000年・ロッテルダム・マラソン16位/2001年・ベルリン・マラソン4位/2002年・福岡国際マラソン2位/2003年・パリ世界選手権マラソン12位/2004年・福岡国際マラソン1位/2005年・ヘルシンキ世界選手権マラソン3位/2006年・福岡国際マラソン6位/2007年・全日本実業団駅伝7区区间4位、大阪世界選手権マラソン5位



灼熱の太陽が照りつけた この夏の大阪

午前7時とはいえ気温は29度。16年ぶりに日本で開催された世界選手権大阪大会の男子マラソンは、大会初日のオープニング種目として8月25日、長居陸上競技場をスタートした。過酷な条件の中で出発した85選手のうち、28人は途中棄権した。前回、ヘルシンキ大会銅メダルの尾方剛(中国電力)は連続メダル獲得、同時に来年の北京五輪代表切符も目指した。

尾方はメダルだけを狙っていた

日本陸連は世界選手権で3位以内の日本選手最上位に北京五輪代表を与える方針だった。ひたすらメダル獲得を意識しながら大阪の熱い路上をひた走った。

ゆっくりと大集団で進んだレースは、14km手前でキベト(ケニア)とキブラガト(ケニア)がペースを上げた。尾方もすかさず前

を追う。だが、このペースアップが後にダメージとなって響いた。

「集団を見て動いたのだが、反応が遅れた。ケニア勢が動く前に反応していれば、展開は違っていたかもしれない。誰も行かないので追ったが、思った以上に脚を使ってしまった。その無理が後半たたったのかもしれない」

30kmを過ぎて、キベトが抜け出した。尾方は懸命に追うが、差は開く。大学の後輩、大崎悟史(NTT西日本)と並走しながら、メダルを目指した。40km手前でロスリン(スイス)、アスメロン(エリトリア)に追いついた。めまぐるしい展開で、アスメロンが先行し、キブラガトが落ちてくる。4、5番手の尾方はそれでも必死に前を追う。

「3位が見えていた。2人抜けば3位だ、いけると思っていた。2位のシャミ(カタール)も見えていた。いったん追いついた時に一気に離そうとしたが、彼らは僕を待っていたようだ。残念ながら僕に余裕がなかった。左足親指付近にマメができたのも誤算だった」

気温32度に達したゴール

2時間17分42秒で5位入賞の尾方に笑顔はなかった。団体戦で日本は金メダルに輝いた。だが、あれほどこだわった個人レースでのメダルを逃した悔しさがほろ苦く残った。2位シャミとは24秒差、3位ロスリンとは17秒差しかなかった。

「悔いはないが、前がずっと見えていただけにやはり悔しい。うまく走っていれば銀メ

ダルは取れていた。ある程度経験は生かされたが、楽に走ることができなかった」

5位入賞ながら、「北京切符」は届かなかった。しかし、大きなアピール材料となったことは確かだ。北京への視界は開けている。今後の五輪代表選考レースの結果によっては、北京代表となる可能性は大きい。

中国電力の僚友油谷繁、佐藤敦之ら代表チャレンジャーたちの心境を思えば、軽々しく「北京」の地名は口にできない。だが、胸に期すものはある。

「五輪選考に関しては自分の力だけじゃあどうにもならない。静かに見守るだけ。仲間たちも頑張ってもらいたい。もし、僕が北京代表になれば、出るだけじゃあ面白くない。メダルを取りたい」



写真:世界選手権男子マラソンで団体優勝した日本勢。日の丸を持つ、左から2目が尾方選手(共同通信社提供)

尾方は39歳まで マラソンを追求するという

いかに楽に42km余りを走れるか、というテーマに挑戦する。暑くなるろうと、途中で仕掛けられようと、ラスト勝負に持ち込まれても柔軟に対応のできる走り。それを追い求める。

「頑張るって走るのは誰でもできる。力を入れなくても、いかに楽に、自分の思うように体を使えるか。すぐに完成するもんじゃない。だから、2012年のロンドン五輪まで走りたい。その時は39歳。金メダルが理想だ」

中学で長距離の魅力にとりつかれ、ジュニア時代は順調に記録を伸ばした。だが、大学でスランプを経験し、故障に悩み、苦しみ抜いた。地元実業団入りしたものの、当初は思うような結果は出なかった。しかし、尾方は持ち前の粘りではい上がってきた。アテネ五輪(2000年)の代表こそ逸したが、2年に1度の世界選手権は3大会連続出場。「遅咲きのエース」は愚直なまでにひたむきに、マラソンロードに挑む。(W)

熊野中学校時代の彼の活躍は、中国中学校駅伝の2区の力走だろう。難所の4kmを2・3年とチームのエースとして2連覇に貢献した。しかし、トラックでは全中には出場できなかった。3000m8分59秒6がベストだった。

熊野高校での彼の頑張り、陸上界の人はご存じと思う。世羅高校の連続出場にストップをかけた。高校駅伝、1区での快走。彼の貯金が11秒差での都大路をオレンジパンツが力走した。国体での10000m2位、渡辺康幸とのデッドヒートも思い出にある。ラスト1000mで彼の前を走ったがラスト80mで軽かわされた。あの悔しさが心のどこかに残っていると思う。2回目の都大路は故障明けでスタミナ切れをこした。また、負けた悔しさが今の原動力になっているのではないか

と思う。

熊野第三小学校周囲を自主練で毎日走っていたことは彼を強くした。中高と学校の本練習は絶対量が少なく、強くなりたいと自主的に取り組んでくれていたのだ。次に、レースで強い選手と走ると大変燃えていた。人について走るのでなく、前を走りたい性格だった。自分が速くなりたいと考え取り組んだのが一番だったと思う。

彼が世界的ランナーに成長するとは…。後輩小島田貴子の頑張りも、尾方をさらに強くしたと思う。日の丸を先に付けて走った彼女の存在も大きな力になった。「来年3月北京オリンピック日本代表になってメダルをとる」彼の夢が現実になるよう応援したい。

熊野中・熊野高校時代恩師 中田 一吉(現熊野中学校 教頭)

広島陸協だより



第25回 レディース陸上大会

秋晴れの10月28日、第25回レディース陸上競技大会が昨年に続き広島開催となった。好天気に恵まれ、好記録も続出し、無事終了したことを喜んだ。

今年は他の大会と重複しないよう願ったが、避けられなかった。しかし、北海道から沖縄まで36都道府県から仲間を誘い、声を掛け合い564人が参加してくださった。遠方から2年連続での参加も多かった。全国の女性の社会人、大学生、高校生、中学生と一緒に競技できる大会は素晴らしいと、この大会意義を改めて感じた。大会新記録も10個誕生した。

前日には昨年同様、四種目のクリニックを行った。3000mSC(内冨恭則氏)・競歩(高橋和則氏)・棒高跳(井上恭治氏)・ハンマー投(窪田恵利子さん)に二年連続講師として指導していただいた。その成果が記録に表れたことは大変、喜ばしいことだった。なお、世界陸上大阪大会に出場された早狩実紀さん、近藤高代さん、綾真澄さんが表彰プレゼンター及び、クリニックのお手伝いもして頂き、綾さんは選手としても出場された。

特筆すべきは、大会開催に合わせて「ピンクリボンキャンペーン」を行ったことである。乳がんの早期発見・治療の大切さを伝えるシンボルマークのピンクリボンを選手・役員全員が付けて競技、審判をした。日本を代表する多くの女子選手からも、サイン入りTシャツ等の商品を提供してもらい、チャリティーに使わせてもらった。結果、約7万円の募金があり、(財)日本対がん協会「乳がんをなくす ほほえみ募金」に寄付をした。

今回、女性の大会で本キャンペーンを行った事は、大会に新たな意味と意義をもたらしたと思う。このような社会貢献活動と大会を合わせて行う試みは陸上競技では全国初である。

第25回という節目の大会を競技力向上とともに、このような活動に協力することができたことを喜び、感謝しています。

大会総務 竹林 幸江



小体連

7月27日(土)、28日(日)に大阪長居陸上競技場で第23回全国小学生陸上競技交流大会が行われた。広島県を代表して22名が出場した。そのうち、猪原玲(栗原)は、男子走幅跳7位、山本有里子(吉和)は、女子走高跳5位とそれぞれ入賞した。その他、トラック種目やフィールド種目で準決勝や決勝に進出するなど、力を発揮した。その代表選手は、広島陸協から世界陸上大阪大会へ招待された。小学生アスリートたちの感想は次のようだった。「世界のトップの走りはすごかった。僕もそんな走りのできる選手になりたい。」「世界で活躍できる選手になれるよう頑張りたい。」「と夢を大きく広げていた。

上安小学校 河田 慎司

中体連

今年度の全中は東北宮城県で行われ、出場選手は例年以上に多種目に渡って出場した。その中で男子100mの古本(大野東)が3位、男子200mの北村(伴)が4位、女子四種競技で佐藤(一ツ橋)が7位、男子四種競技の馬明(中広)が8位と4人が入賞した。古本、北村、馬明はジュニアオリンピックでも入賞し、今年度大活躍した選手。記録で言えば今年度、県総体で佐藤(一ツ橋)が砲丸投で14m77の44年ぶりとなる県中学校新記録を樹立した。今後も中学生の活躍を大いに期待して、応援をお願いしたい。

中広中学校 田川 司

高体連

レディース陸上で広島県のトラックシーズンは幕を閉じた。昨シーズンは大阪インターハイにおいて久保瑠里子(井口高→福島大)が800m、木村文子(祇園北高→横浜国大)が走幅跳で優勝し、仲田愛(西条農高→鹿屋体育大)が国体棒高跳で優勝し、レディース高校生の活躍が目立った年であった。2007年度を振り返ってみると、インターハイ・国体で頂点を極めた高校選手はいなかった。その中で光っているのが、国体少年A400mで2位に輝いた浦野晃弘(皆実高)があげられる。才能に恵まれ1年生の時から威光を放っているが、まだビッグタイトルは手にしていない。400mやマイルリレーにおいて来年度大いに期待できる逸材である。中国高校新人において投擲2種目(砲丸・円盤)を制した安芸高校の西田直樹の活躍にも注目したい。女子高校生も健在だ。中国高校新人において大会新記録で優勝した市立呉高の4×400mリレーチーム(大兼政・小池・川本・藤村)と3000mで田村紀薫(広島井口高)、走幅跳の井上文華(五日市高)は来年度全国で活躍が期待できる選手たちである。中国高校新人で優勝した広島県の選手・チームはまだまだある。次号より少しずつ紹介していきたい。冬季シーズンにしっかりトレーニング

を積んで来年度全国で大暴れして欲しいものだ。

井口高校 松崎 親男

学生連盟

広島経済大の中四国インカレ16連覇で始まり、広島大の28大会ぶり全日本大学駅伝出場で締めくくった2007年の県学連は、特に女子競技者の活躍が著しかった。日本インカレでは円盤投げで石井智紘(福山平成大)が銀メダルを獲得し、全日本学生チャンピオンシップでも3位に入賞した。また、同大学の同級生田阪亜樹は全日本学生チャンピオンシップで7位(400mH)に入賞すると、翌週の西日本インカレ800mで中四国学生新記録を樹立して2位に入賞した。さらに、田阪は中四国学生選手権の400mHでも中四国学生新記録を達成し、レディース陸上でも同種目で優勝し、今年の県学連MVPに値する活躍であった。1600mRでは広島経済大が中四国学生新記録を更新しており、来シーズンのさらなる活躍が期待される。

実業団連盟

駅伝では「ルーキー」が大活躍!

10月28日「第45回広島県実業団駅伝」が、岡山との合同で「第2回べいふぁーむ駅伝」として笠岡市で行われ、優勝JFEスチール(A)・2位中国電力・3位マツダ(A)の成績だった。レースは、序盤から先行した中国電力を3区で逆転したJFEスチール(A)が逃げ切る展開となり、6区間の中で3人の新人選手《1区 藤森選手(中国電力)・3区 ギタウ選手(JFEスチール)・5区 森脇(JFEスチール)》が区間賞をとるなどの活躍が目立った。また、10月29日～11月3日の日程で山口県周防大島町にて4強チーム(JFEスチール・中国電力・マツダ・中電工)総勢65名で、今後の駅伝・マラソンへ向けての合同合宿を行った。

マスターズ連盟

陸マガで馴染みの「青春の火は燃ゆる」のマスターズ陸上。中高年齢の陸上競技愛好者が「生涯スポーツとして、心身の健康と保持増進を図りながら年代別(5才刻み)の記録を楽しみに会員相互の親睦を図っている。若い時に楽しんだ陸上競技、中高年になって試してみたかった「走・跳・投」の自己記録。体力の確認へ…多くの仲間が集っている。今年度も広島県選手権大会、中国、全国、アジア、世界大会そして駅伝大会等の主要競技大会が行われた。又、スポレク、ねんりんピックなどの全国各地で行われる競技会へも多くの会員が県代表として参加した。高校、大学、実業団の先に…「マスターズ陸上」がある。

お問合せは 事務局 0823-24-2822 中田

竹林審判委員長に質問です。

このたびの道路競走における自動応答計時システム(通称:チップ)による計時記録の全面公認について教えてください。

IAAFはこれまで「自動応答システムによる計時は、道路競技で樹立された世界記録としては認めない。」と競技規則第261条ならびに第262条の「注-IAAF」で規定していましたが、2007年8月22~23日に大阪で開催された第46回IAAF総会における競技規則修正審議で、この規定を削除し、自動応答計時システムによる計時をすべて公認することを決定しました。

そして、通常の規則修正適用は決定した年の11月1日(日本陸連は翌年4月1日)からですが、この修正事項だけは例外的に2007年8月25日(世界陸上大阪大会)から適用することも併せて決定しました。

この決定に伴い、年度途中ですが、日本陸上競技連盟競技規則においても2007年10月1日より、道路競技での自動応答計時システム(通称:チップ)による計時記録は、途中計時も含めてすべて公認にすることを、日本陸連理事会で決定したと聞いています。

審判委員長 竹林 良典

ご苦労様でした、真夏の大阪世界陸上

選手村副村長 三宅 勝次

8月25日日本選手団の先陣を切って、尾方君5位入賞ご苦労様でした。調子が悪くあと少しで予選通過ならず、為ちゃんご苦労様でした。副村長の名前に負け、素晴らしい部屋を与えていただき、自由に競技を見られると勘違いをした自分に腹を立てながら、8月19日から9月3日までリーガロイヤルホテルにおいて、158か国のべ1400名の選手のお世話をほとんど缶詰状態で努めました。着るものも食べるものも無い、泣くに泣けない日々でした。ホテル側の全面的なご理解により、TIC(陸連)・アタッシュ(通訳等)旅行業者が丸一丸となって、早朝から深夜までほとんど不眠状態で乗り切った皆さん、本当にご苦労さまでした。しかし、エリトリアの選手は23日の深夜到着、部屋が無くロビーで毛布にくるまって仮眠、25日のマラソン4位入賞はアップレでした。LOC(組織委員会)がまったく機能しない異常な中で、いろいろトラブルを適切に処理した医事・警備等の素晴らしいチームワークご苦労様でした。他のホテルから選手の水が無いと緊急連絡、これは副村長仕事かと思ながら40分で届けて解決。いろいろミスがあってアタッシュに何度も頭を下げて謝りました。毎日ほとんど同じ食料を使った食事美味しそうに食べて、全力で競技して感動を与えてくれた選手の皆さんご苦労様でした。外国人選手の人気No.1はバナナNo.2はリンゴジュースでした。競技場で、そしてテレビで応援して頂いた皆さんご苦労様でした。陸上関係者の皆さんご苦労様でした。熱い、暑い夏でした。

世界陸上大阪大会にトレーナーとして参加して

メディカルスタッフ(フィジオ) 石井 成之

世界陸上大阪大会に、広島陸上競技協会に所属する石井成之、石井高幸、廣重陽介の3名が大会オフィシャルのトレーナーとして参加しました。主な任務は、競技中に生じたアクシデントに対応する「救護」や、外国人選手に対するコンディショニングなどでした。特にスタジアム救護は、トレーナー同士、医療スタッフとの連携もできており、こうしたシステムを広島県内の大会にも導入し、より安心して競技に取り組み、記録にチャレンジできる環境の整備が必要だと改めて感じました。また、練習会場やウォームアップエリアで外国人選手たちの体格や動きを目の当たりにし世界レベルを痛感し、ジャマイカ・バハマの選手と実際に接する中で彼らの筋肉の厚さに驚くとともにメンタルな強さも感じる事ができました。今大会での経験をもとに、県内のトレーナー活動を充実、整備して行ければと思っています。具体的には、大会でのトレーナー活動やトレーナー派遣などを通して、現場での経験値を増やしていく事、今まで以上に現場と医療との繋がりを密にして行く事、そして大会運営にあたり、他の審判、役員との連携を築いて行く事などが挙げられます。また、トレーナーの存在や業務に対する認知度を少しでも上げていき、より良い形で活用されるようになる事を望んでいます。こうした活動を通して、広島陸上界の強化・発展に少しでも貢献できればと思います。今後も、県内大会などでのトレーナー活動にご理解、ご協力をよろしく願っています。

世界陸上大阪大会に審判員として参加して

投擲審判員 大林 和彦

私は、このたび長居陸上競技場で9日間(8月25日~9月2日)行われた。第11回IAAF世界陸上競技選手権大会大阪大会に審判員として参加させて頂きました。この大会は、世界最大のイベントの1つとして認められ、203の国と地域から過去最大規模の参加数となりました。私の仕事は、男女マラソンの20km関門の審判と投擲競技の審判でした。日々睡眠時間4時間と厳しい毎日でしたが、世界のトップアスリートが世界一を目指し、真剣勝負で戦う迫力の中、常に緊張と興奮の連続で疲れを感じさせない毎日でした。特に一番の思い出は、自分が現役時代行っていた男子やり投げの審判をしたことでした。落下の主審として、紅白の旗を持ちジャッチをさせて頂き本当に幸せでした。最後の投擲者のテロ・ピトカマキ(フィンランド)が90mを越え、それをジャッチした瞬間、体が震え、言いようがない感動がありました。私の一生の宝物になりました。このような貴重な経験をさせて頂いた広島陸上競技協会・大阪陸上競技協会・西条農業高等学校の皆様、各方面に感謝し、今後はこのような夢や感動を与える指導者になることで、恩返しに行こうと思います。ありがとうございました。



編集後記 JAAP HIROSHIMA 広陸協BLOG

陸協「ひろしま」リニューアル

新しく企画広報委員長になって半年が経ちました。その間、新しい企画広報委員との会合を重ねて、陸協の広報誌であるこの陸協「ひろしま」のリニューアルの準備を進めてきました。みんなでアイデアを出し合い工夫をしてみました。メインの記事である尾方選手には大変忙しいところをインタビューにに応じていただきました。また、その他の記事を書いていた皆さまにも締め切りを守って原稿を送っていただき本当に感謝しています。作成に時間がかかった広報誌ですが、最初のコンセプトをしっかりと、その後、内容をどのように組み立てるかという編集、そして最終的に体裁をどうするか、というように編集委員で考えをめぐらしながらやっとながら進んでいきました。

新しい試みなので、この広報誌に対してのご意見をたくさんいただきたいと思ひます。良いと思われるところがあれば教えていただきたいし、足りないところがあれば意見をいただきたい。工夫が必要であれば、どのようにしたらいかも含めて具体的に指摘してもらいたいです。今回のスタイルに執着するのではなく、もっとみなさんに読んで楽しんでもらえる広報誌にしていきたいと思っていますので是非ご意見ください。

将来的にはウェブマガジンをとしてホームページでも同じ内容が配信できるようになればと思っています。簡単なことではありませんが、一歩一歩進んでいきたいです。

企画広報委員長 浜崎 正信

New Hope キラリ Young Athlete

未来のナンバーワン!!



山本 智貴(一ツ橋中学校陸上競技部主将)

全国中学校陸上競技選手権:棒高跳出場ベスト4m 21cm 200m、ベスト23秒15、400mベスト52秒34 本年度広島県中学棒高跳ランキング第1位の山本は、多種目に才能を発揮している。今後はどのような種目にチャレンジするのか、そしてどんな選手に成長するのか楽しみなホープである。

800mリレーのアンカーをつとめたときのような爽快な走りを見せます。9月の県中学総体では、400mリレーの決勝を見るのが楽しみでした。8番手あたりでバトンを受け取った彼は、ぐんぐん加速し4番にまで押し上げました。まるでリニアモーターカーが滑るように加速するイメージそのものでした。観客は彼の追い上げを見てウォーという地響きに似た歓声を上げました。棒高跳選手として活躍してほしいですが、棒高跳だけに専念するのはもったいない気がします。陸上競技を思い切り楽しんでほしいと思います。それだけの能力は十分に備えています。

PVA広島(陸協棒高跳教室)代表 井上 恭治